知覚動考

「誰一人取り残さない　子供が育つ学校づくり」

寒河江市立南部小学校
校長室だより
校長　白田　敏幸

興味がないとすぐに忘れるが、興味があれば忘れない

「好きこそものの上手なれ」

これは、「好きなことならば、熱心に取り組むので自然と上達する」という意味のことわざです。有名なことわざではありますが、本当の意味で理解している大人は、どれぐらいいるでしょうか？学校教育や家庭教育においてもぴったりと当てはまると私は思っています。

話は変わりますが、ある教員から、「教師としてどのような本を読んだらいいのか？」と聞かれたことがあります。その時私は、「どんな本でもいいんじゃないですか？」と答えました。なぜどんな本でもいいのか。それは、**本人が興味のない本を読んだとしてもほとんど頭に入らない**からです。私自身、高校生の時、大学受験のために夏目漱石や太宰治など、名作といわれる本を読みました。読んだ理由は、「そういった本をたくさん読むと、国語に強くなる。」と言われたからです。しかし、まったく面白くなく、今では、どんな内容であったか覚えていません。

最近の研究では、「最高の先生が最高の授業をしても、聞いている子供たちが興味をもっていなかったら、学習を終えた後は授業内容をほとんど忘れてしまう。」という結果が出ているそうです。ですので、いくらいい本を薦めてみても、本人に興味関心がなければ、身につかないのです。

教育で大事なのは、**子供が潜在的にもっている興味や関心を引き出すこと**だと考えています。よく教員は、「テストに出るから、よく覚えておくこと！」と言います。*（今はあまり言わなくなったかもしれませんが、私が担任をしていた時は、よく言っていたと記憶しています。）*そう言われた子供は、嫌々ながら仕方なく勉強します。ですが、テストが終わってしまえば、興味のないことはすぐに忘れてしまいます。興味のないことは覚えにくくすぐに忘れますが、興味のあることは覚えやすく、なかなか忘れません。それが人間の頭の構造なのです。*（勉強嫌いな子供でも、興味のあること、ゲームのキャラクターなどは、とんでもない量を覚えます。）*　興味のない人に対して教える方法はないのかもしれません。逆に、**興味をもったことや勉強したいと思ったことを、興味をもったときに教えるのが一番効果的**だと思います。

何にも興味示さない子供は放っておいていいのか？それでは、学校教育や家庭教育は崩壊してしまいます。

こんな考え方はどうでしょう。よくホテルなどの食事で「ビュッフェ」があります。好きなものを好きなだけ食べられる方式ですが、食べたことのものを少しだけ食べ、もしおいしかったらガッツリ食べる。もしかしたら、教育もこのビュッフェのように、子供にいろいろなものを見せて、体験させた上で子供が楽しそうにやっているものを**大人が見極める**。そして、その楽しそうにやっている、興味をもっていることを精一杯やらせてみる。学ぶ内容が決まっている学校ではなかなか難しいものがありますが、こういったことが大事なのではないかと考えるようになりました。興味のないことを無理やりやらせても身につかないだけでなく、**「学ぶことを嫌いに」**させることにつながってしまう恐れがあります。（学びことが嫌いな子供が大人になれば、変化の激しい社会を生き抜くことは困難になります。）

大人ができること。それは、**「人と違っていいんだよ。」「人にはいろいろな個性があるんだよ。」と子供の多様性を認めた上で、「いろいろな世界を子供に見せて、子供の興味関心を引き出す」こと**ではないでしょうか。

偏った考えかもしれません。「そんなの理想だよ。」と言われるかもしれませんが、学校として、校長として、常に理想は高くもちたいと思っています。